

## 宗教学言語ゲーム論と宗教学間対話の言語

星川啓慈（大正大学）

### 本発表の内容

いまさら言うまでもなく、ワイトゲンシュタインの哲学はさまざまな学問に影響を及ぼした。宗教学研究（宗教学・宗教哲学・神学など）も例外ではない。その影響は、大きく次の二つに分けることができる。第一に、ワイトゲンシュタイン自身を「宗教的人間」(homo religiosus)の一事例として研究することである。彼を二〇世紀屈指の「否定神学者」として位置付けることも可能である。第二に、ワイトゲンシュタインの思索内容を宗教学研究に適用することである。二〇四〇年ほどの研究史をふりかえると、「言語ゲーム」概念を宗教学研究に応用するものが目立つ。

もちろん、第二の試みは、奥雅博氏を始めとして、多くのワイトゲンシュタイン研究者が認めないことは承知している。たとえば、奥氏は以下のように論じている。

「宗教」ないし「キリスト教」「カトリック」といった体系ないし大規模概念それ自体は、「言語ゲーム」とワイトゲンシュタインが呼んだものではないのである。それ故、「仏教の言語ゲーム」「イスラム教の言語ゲーム」という言い方はワイトゲンシュタインにとって誤用に他ならない。(『ワイトゲンシュタインと奥雅博の三五年』)

しかしながら、実際問題として、宗教学研究では、ワイトゲンシュタインの「言語ゲーム」概念に触発されて、非常に多くの研究が蓄積されてきている。言つまでもなく、「ワイトゲンシュタインの言語ゲームとは何か」を突き止めるための、テキストに即した研究は必要である。しかしながら、そうした精確な言語ゲーム理解を文献学的に追及することからやや離れて、「言語ゲーム」論を他の学問領域に移植した結果、その学問における議論が展開されることは決して悪いことではないだろう。

本発表では、かつて発表者自身が「宗教言語ゲーム論」を展開したこともあるので、第二の観点から議論を展開したい。すなわち、現在その必要性がさげられながら、多くの問題を抱え込んでいる「宗教間対話」(inter(-)religious dialogue)と言語ゲームとを絡めて愚見を示したい。具体的に本発表で取り上げるものは、次のものである。

D・Z・フィリップスたちのいわゆる「ワイトゲンシュタイン・フィディズム」  
G・A・リンドベックの「教理の規則理論」

発表者の「宗教言語ゲーム論」と宗教学間対話で使用される言語

### 本発表の根底にある事柄

宗教間対話との関連で、発表者の根底にある事柄は、たとえば、以下のようなワイトゲンシュタインの言葉に象徴される事柄である。

われわれが原始人とみなしている人々が神託を仰ぎ、それにしたがって行動するのは誤りだろうか。これを「誤り」と呼ぶとき、われわれは自分たちの言語ゲームを根拠にして彼らの言語ゲームを攻撃しているのではないか。(『確実性について』六〇九節)

では、われわれが彼らの言語ゲームを攻撃することは正しいか、それとも誤りか。(同書 六一〇節)

二つの相容れない原理がぶつかりあう場合には、どちらも相手を蒙昧と断じ、異端と罵る。(同書、六一一節)

こうしたワイトゲンシュタインの言葉に関連して、鬼界彰夫氏は以下のように論じている。なお、引用文中の「」内は、鬼界氏の見解を宗教に適用するとどうなるか、ということである。

我々の世界像と他の世界像はほとんど共有するものがない。それらは根底において異なっている。それが世界像が異なるということである。したがって我々の「世界像の下で営まれている」言語ゲームと他の世界像の下で営まれている言語ゲームは接点のない互いに外部に存在する実践なのである。ところが我々がその世界像を「誤り」と呼ぶことは、彼らに対してその世界像を変更することを要求することに他ならない。それが誰かに対して「誤り」と言うことの意味である。「宗教によく見られる「排他主義」。キリスト教では、キプリアヌスの「教会の外に救いなし」いらい連綿とこの伝統は続いている」。そしてこの要求によって我々は彼らが我々と共通の言語ゲームを営んでいるかのように振る舞っているのである。強引に彼らを自分の言語ゲームに引きずり込んでいると言ってもいいだろう。「われは、たとえばK・ラーナーの「無名のキリスト教徒」という考え方に代表される「包括主義」に当てはまる」。しかし現実にはそうした共通の言語ゲームは存在しない。異なる「宗教的世界像」をもつ信者の間では対話は成立しない。(『ワイトゲンシュタインはこう考えた』)

### 宗教間対話で使用される言語

仮説的に、宗教にかかわる言説を、第一次水準の言語(一種の対象言語)と第二次水準の言語(一種のメタ言語)によるものとに分け、個々の宗教内部での言説は前者のレベルで、宗教間対話は後者のレベルでおこなわれると考える。宗教Aと宗教Bの場合でいえば、第一次水準の言語では相互理解の可能性はないだろう。これは、フィデイズムやリンドベックの教理論がもたらす帰結でもある。だが、第二次水準の言語では対話は可能ではないか。第二次水準の言語とは、自分の信じている宗教に関与しながらも、それに反省的眼差しを向けると同時に、相手の宗教も眼界に入れながら生み出される言説のことである。

だが、問題になる事柄として、以下のようなものが多い浮かぶ。

たとえ、宗教Aと宗教Bは、宗教的世界像が異なるがゆえに、異なる言語ゲームであることは認めることができるとしても、「個別の宗教の言語ゲームと対話の言語ゲームという二つの水準の言語ゲームを同定/区別しうるのか」という問題。

さらに遡って、第一次水準の言語ゲームとしての「言語ゲームとしてのキリスト教」「言語ゲームとしての仏教」という宗教現象の捉え方が成立するか否か、という問題。「これは、ワイトゲンシュタインの言語ゲームの正確な理解であるか否かということではなく、「ある宗教の 論理 をアプリオリに前提としているのではないか」という問題である。

### 今後の展望

今後の展望を述べれば、ワイトゲンシュタインの『確実性について』を読み直し、そこで展開されている種々の議論を整理し、宗教の言語ゲームの個別性と普遍性について考え直してみたいと思っている。そして、そうすることが、宗教間対話で使用される言語をめぐる考察に、一条の光を投げかけるものだと信じる。

宗教間対話の研究では、対話で使用される言語についての哲学的考察が疎かにされている感がある。哲学的・神学的な宗教間対話がますます深いレベルで行なわれるようになるためには、対話で使用される言語をめぐる哲学的考察が是非とも必要である。